

東邦大学学術リポジトリ



OPAC

東邦大学メディアセンター

タイトル	第10回東邦大学医学部佐倉病院内科学講座例会および第7回東邦医学会佐倉内科分科会
別タイトル	10th General Meeting of the Department of Internal Medicine, Sakura Hospital, Faculty of Medicine, Toho University and 7th Subcommittee Meeting of the Medical Society of Toho University
公開者	東邦大学医学会
発行日	2015.03
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 62(1). p.63 69.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	学会抄録(分科会)
著者版フラグ	publisher
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD68655486

第10回東邦大学医学部佐倉病院内科学講座例会 および第7回東邦医学会佐倉内科分科会

2014年11月30日(日) 10時~17時40分
ホテルニューオータニ幕張(2階 ステラ)

開会の挨拶 野池博文教授 (10:00~10:10)

第I部 学内研究発表(発表6分, 討議3分) 10:10~11:00

座長 武城英明, 清水直美

A グループ(呼吸器・免疫・アレルギー)

1. 特発性肺線維症急性増悪 (acute exacerbation of idiopathic pulmonary fibrosis : AE-IPF) に対する遺伝子組み換えトロンボモジュリン製剤 (rTM) の有効性の検討

早川 翔

前向き研究として2012年10月以降に発症した acute exacerbation of idiopathic pulmonary fibrosis (AE-IPF) 症例に対しステロイドパルス療法に加えて recombinant human soluble thrombomodulin (rTM) 380 U/kg×7日間を併用した。試験開始前の rTM 非投与 13例を対象とし、治療開始1週間での PaO₂/FiO₂ (P/F) 比、非挿管での生存期間を主要項目として比較した結果、そのいずれも優位な改善傾向が認められた。AE-IPF に対する rTM 製剤の有効性が証明された。

B グループ(糖尿病代謝内分泌)

1. Nonalcoholic fatty liver disease (NAFLD) における脂質胆汁酸代謝の変化と酸化コレステロールの関わり

山口 崇

コレステロール~胆汁酸合成系は肝臓の脂質および酸化脂質の量を調節するが、nonalcoholic fatty liver disease (NAFLD) における役割は十分検討されていない。われわれは、NAFLD の程度と相関してラット肝に酸化脂質が蓄積していることを見だし、そこに脂質胆汁酸代謝の異常が関与する可能性を明らかにした。

C グループ(循環器)

1. 心臓周囲脂肪は皮下・内臓脂肪と減量治療反応性および遺伝子発現が異なる

美甘周史

肥満患者の減量治療に伴う、心臓周囲脂肪および他の脂肪組織の反応性の比較、その基盤となる脂肪組織の遺伝子発現同定を検討した。その結果、心臓周囲脂肪は他の脂肪組織と比較して、異なる性質を有していた。

D グループ (消化器)

1. Low-density lipoprotein receptor relative with eleven binding repeats (LR11) と炎症性腸疾患との関連性についての検討

勝俣雅夫

炎症性腸疾患 (inflammatory bowel disease : IBD) は慢性的な炎症により腸管粘膜が障害されて下痢や腹痛, 血便などを発症する疾患である. その診断とモニタリングには, 臨床症状や内視鏡や放射線画像による画像診断のほか, C-reactive protein (CRP) などの血清マーカーや便中カルプロテクチンなどの便中マーカーなども用いられている. Low-density lipoprotein (LDL) receptor relative with eleven binding repeats (LR11) は LDL 受容体ファミリーの一種で, 動脈硬化巣の内膜平滑筋細胞に特異的に発現し細胞外へ放出される新しいマーカーであり, 動脈硬化だけではなく, 網膜症, 肝線維化や悪性腫瘍などでも発現が増加すると報告されている. 今回, IBD の腸管粘膜の炎症における LR11 の関連を研究する目的で, 潰瘍性大腸炎 (58 例) とクローン病 (39 例) で臨床背景や粘膜所見と LR11 発現状態の関連性について検討した.

E グループ (神経内科)

1. 脊髄小脳変性症における高次機能障害の検討

館野冬樹

脊髄小脳変性症 25 名の高次機能について, Mini-Mental State Examination (MMSE), Frontal Assessment Battery (FAB), および Alzheimer's Disease Assessment Scale-Cognitive (ADAScog) を施行し検討した. その結果, FAB 主体の低下が認められ, 全体的認知機能低下は認めなかった. Superior cerebellar artery (SCA) は前頭葉皮質病変がみられず, 前頭葉小脳線維連絡を介した障害も推定される.

第 II 部 前期 1 年目研修医 (発表 5 分, 討議 3 分, 予備 16 分) 11 : 10 ~ 12 : 30

座長 東丸貴信, 榊原隆次

1. メトトレキサート関連リンパ増殖性疾患 (methotrexate-associated lymphoproliferative disorders : MTX-LPD) の 1 症例

大内祐香

74 歳男性. 40 年前に rheumatoid arthritis (RA) の診断, methotrexate (MTX) 長期内服. 右殿部腫瘍生検にて悪性リンパ腫 clinical stage (CS) IVA の診断となる. MTX 中断, 腫瘍縮小後, rituximab-cyclophosphamide, hydroxydaunorubicin, oncovin, prednisone (R-CHOP) 療法導入し安全に加療した症例を経験したので報告する.

2. 大腸癌による腸管狭窄に対しステントを留置した 1 例

岡 洋佑

68 歳男性. 便秘にて紹介受診. 精査にて直腸癌 (rectosigmoid : Rs) T3, N3, M1 Stage IV と診断. 病変は高度狭窄を引き起こしていたため狭窄部位に対し大腸ステント留置術施行. 大腸の減圧を図り, いったん退院した後外科の手術を予定している.

3. Intensive Care Unit (ICU) で治療に難渋した肺炎の 1 例

木村道明

78 歳男性. 10 日間程の食思不振, 倦怠感の後, 意識障害で救急搬送された. 高血糖高浸透圧症候群・肺炎・瘰癧の診断で Intensive Care Unit (ICU) 入院加療. 血糖・瘰癧素改善傾向も肺炎の状態は悪化し治療に難渋した症例を経験した.

4. 骨髄移植後に急性な呼吸機能低下と空洞結節影を伴った 1 例

佐藤宏樹

32 歳女性. 前医で急性骨髄性白血病に対し非血縁者間造血幹細胞移植を施行後, 慢性 graft versus host disease (GVHD) 発症. ステロイドと免疫抑制剤使用中に空洞結節影と急性呼吸機能障害が生じ当院転院. 気管支鏡検査でノカルジアを疑

い抗真菌薬、抗菌薬で治療したが呼吸状態悪化し死亡した1例を文献的考察を加え報告する。

5. Sodium-glucose transporter-2 (SGLT-2) 阻害薬が効果を示した1例

戸谷俊介

54歳男性。12年前他院にて2型糖尿病を指摘され、血糖コントロール不良となり当院紹介となった。入院後 sodium-glucose transporter-2 (SGLT-2) 阻害薬により血糖コントロールが改善したので、文献的考察を加えて報告する。

6. 急性心筋梗塞後 cardiopulmonary arrest (CPA) から蘇生に成功した1例

中村祥子

62歳女性。心窩部痛が出現した2時間後、心肺停止の状態で見送られ当院救急搬送。病歴より急性心筋梗塞を疑い、percutaneous cardiopulmonary support (PCPS)・intraaortic balloon pumping (IABP)を導入したところで自己心拍再開となり、蘇生に成功した。若干の文献的考察を加えて報告する。

7. 口渇中枢障害を疑った症例

波平制士

17歳男性。特発性成長ホルモン分泌不全症で2009年まで当院小児科通院。今回他科受診時採血を行い、Na 173 mEq/L, BUN 32.6 mg/dl, Cre 1.85 mg/dl と高Na血症および急性腎不全を認めて、当科即日入院となった。鑑別疾患および文献的考察を交えて報告する。

8. 肥満外科治療により良好に減量できた1例と術後成績

渡邊蔵人

55歳女性。数年でトラブルが重なり、暴飲暴食を繰り返し急激に体重が増加。家庭内が落ち着いてきた時に自分の体調を心配するようになり減量することを決意し、当院肥満外来受診。手術に至った1例を報告する。

第III部 学位表彰 12:30~12:40 授与 鈴木康夫

表彰

館野冬樹 甲第501号

Levodopa ameliorated anorectal constipation in *de novo* Parkinson's disease : The QL-GAT study

Parkinsonism Relat Disord 17: 662-666, 2011

永山大二 乙第2672号

Effects of serotonin on expression of the LDL receptor family member LR11 and 7-ketocholesterol-induced apoptosis in human vascular smooth muscle cells

Biochem Biophys Res Commun 446: 906-910, 2014

第IV部 前期2年目研修医発表(発表5分, 討議3分, 予備14分) 13:10~14:20

座長 岸 雅彦, 竹内 健

1. 首下がり症状にて発覚した Parkinson 病に重症筋無力症を合併した1例

岩川幹弘

77歳女性。約5年前より Parkinson 症状あり内服治療開始していた。本年に入り“首下がり”が新たに出現した。精査を行い重症筋無力症と診断。Parkinson 病に重症筋無力症を合併した貴重な1例を経験したため文献的考察を交え報告する。

2. 診断困難であり、脳生検により診断となった白質脳症の1例

山本景一郎

54歳女性。亜急性の経過をたどる歩行障害・認知機能障害があり、他院にて多発性硬化症の疑いがあるため精査目的で

当院紹介受診となった。小脳失調，錐体路徴候認め，magnetic resonance imaging (MRI) では小脳脚，大脳深部白質に白質病変を認めたが，採血では特異的な所見は認めず，診断に苦慮した。症状の増悪を認めたため脳生検を施行し，診断に至った1例を考察を含め今回報告する。

3. I型高脂血症が疑われた1例

杉崎雄太

25歳男性。2型糖尿病，高度高中性脂肪血症により入院となった。高中性脂肪血症に関しては糖尿病の治療のみで徐々に低下傾向が認められたが，血清中性脂肪値が6415 mg/dlと非常に高値であったこと，高カイロミクロン血症が認められたことから lipoprotein lipase (LPL) 活性の低下の可能性を疑った。

4. 問診が診断の鍵となった発熱患者の1例

若林宏樹

既往症のない15歳男性。5日前からの発熱，経口摂取不良で入院管理となった。生活歴からレプトスピラ症を疑い，抗菌薬投与を施行したところ全身状態は速やかに改善。退院後血清抗体価からレプトスピラ症と診断した。

5. 胃癌に対してトラスツズマブ投与中に心不全を発症した1例

宋本尚俊

76歳男性。胃癌に対し胃全摘術施行後にトラスツズマブと tegafur, gimeracil, oteracil, potassium (TS-1) による抗癌剤治療を施行中に心不全増悪による労作時の息切れが出現した。心毒性のある抗癌剤の概説と副作用への予防・対処について検討する。

6. 突然の心室細動により死亡した心筋梗塞の1例

伊藤拓朗

ペースメーカー植え込み後の84歳男性。呼吸苦で救急車を要請し，ショックバイタルで当院搬送。心原性ショック疑いで緊急カテーテル施行となったが，検査直前より心室細動出現により死亡した1例を報告する。

7. 血中 low-density lipoprotein (LPL) receptor relative with eleven binding repeats (LR11) は高度肥満における脂肪組織のインスリン抵抗性を反映する

鍋倉大樹

脂肪組織における low-density lipoprotein (LPL) receptor relative with eleven binding repeats (LR11) の役割を明らかにするため，高度肥満者の血中 LR11 および体組成・糖脂質代謝を肥満外科治療前後で検討した。術前の血中 LR11 は高く術後体重減少に伴い低下した。血中 LR11 は triglyceride (TG)，LPL mass と相関し脂肪組織のインスリン感受性を反映すると推測された。

第V部 平成26年度最優秀論文賞（白井賞）14：20～14：50

基調講演と表彰

司会：松澤康雄 授与：白井厚治

若林 徹

Evaluation of reactive oxygen metabolites in patients with non-small cell lung cancer after chemotherapy

Wakabayashi T, Kawashima T, Matsuzawa Y
Multidiscip Respir Med 9: 44, 2014

第VI部 佐倉病院のめざすところ（発表10分）15:00～16:00

第1部 佐倉内科の未来

15:00～15:10

専門性と総合力を有する内科医の育成をめざして一志は高く、目線は低く—

鈴木康夫

佐倉病院内科学講座は、呼吸器アレルギー疾患、糖尿病内分泌代謝、循環器疾患、消化器疾患、神経内科疾患に対して深い洞察力の習得と先進医療が実践できる専門医を育成すると同時に専門領域にとらわれず各種内科疾患を広く理解し総合力を有する視野の広い内科医であることを同時に育成すること、そして専門性における研究・臨床力は世界トップレベルをめざしながらも診療現場においては患者目線のレベルで思考しながら最善の医療を実践できる柔軟性を身に着けること、それらをめざす医局運営を心がける。

第2部 各グループの夢

15:10～16:00

1. Aグループ（呼吸器・免疫・アレルギー）15:10～15:20

呼吸器内科のめざすところ

松澤康雄

1997年、私は1年間の約束で、助手の末席、免疫・アレルギーグループの5番手として当院に出張してきた。当時、自分が診療責任者になる日が来るとは夢にも思わなかった。しかし、千葉県北部の呼吸器内科が相次いで崩壊するという危機のさなか、その日はやってきた。他に人材がなかったということであろう。しかし、やらねばならない。

まず、危機への対応として、気管支喘息・chronic obstructive pulmonary disease (COPD)等のcommon diseaseについては、診療の標準化と、病診連携・病病連携の推進で対応することとし、悪性腫瘍、難病に力を注ぐこととした。結果、外来においては、患者総数を増やさずに紹介患者が増え、外来化学療法も著増した。入院においては、在院日数短縮により、入院数を増やしながらい院数は適正水準内に抑えられるようになった。事故なく、トラブルも非常に少なく、臨床面では、順調である。

研究については、急激に増えた症例をデータベース化しながら、複数の臨床研究を開始した。今年になり、その成果が表れてきた。実績では、他のグループははるか先方を走っていて、背中すらまだ見えない。しかし、来年度は、さらなる発展の年になるはずである。

2. Bグループ（糖尿病代謝内分泌）15:20～15:30

糖尿病内分泌代謝センターこの1年と来年への課題

龍野一郎

赴任して早くも4度目の佐倉内科学講座の例会の開催を迎え、毎年のことながら1年の時間経過の早さに驚きます。その一方、例会を迎えると、この1年自分が何をやってきたのか？日ごろの時間に押し流されず、われわれが一般病院と異なった大学病院に所属するものとして、どんな医学の進歩に貢献をしたのか？それを厳しく自分に問いかける機会ともなるわけです。

本年度のトピックスとして、①清水直美先生に千葉大学から赴任いただき、長年の悲願であった血液分野を内科学講座の中に組み込めたこと、②永山大二先生が長年の臨床研究の成果を結実させ、英文3報を一挙にだし、学位を取得したこと（彼にはこの経験を生かして地域医療のリーダーとしてぜひ、活躍を祈っています。）、③渡邊康弘先生・渡邊怜奈先生の若い力がわれわれのグループに参加してくれたこと、④栄養部に新しく鮫田真理子室長を迎え、新たな臨床栄養を推し進める体制を構築できたことを挙げるができるでしょう。

この1年の実績を考えると、佐倉病院では10月までの約10カ月で80報を超える英文が発表され、競争的研究費の獲得でもほぼ大森病院と肩を並べる存在になり、その活躍は東邦大学3病院の中でも特筆すべきものとなっています。糖尿病内分泌代謝センターでは10月までに7つの英文論文と4つの国際学会・会議、国内の主要12学会で多数の発表が行われましたが、数に満足せず、今後とも世界に誇れる研究をめざしたいと思います。

われわれ、糖尿病内分泌代謝センターはそのミッションである「地域に信頼される専門・先端診療の実践」、「疾患の分子病態解明とそれに根差す臨床研究の推進」、「総合内科臨床能力を持つ専門医・臨床研究者の育成」を常に心に留め、グループ一丸となって進んで行きたいと思っています。

最後に日頃よりわれわれのグループの活動に理解いただき、支えていただいている鈴木康夫教授、野池博文教授、東丸貴信教授、武城英明教授をはじめ、内科学講座の先生方に感謝します。

3. C グループ (循環器) 15:30~15:40

循環器内科がめざすところ

野池博文

2013年は心臓外科の徳弘圭一先生が、2014年には益原大志先生の東邦大学出身の2名の先生が相次いで退職、その後任として東京大学から本村昇先生、続いて齋藤綾先生の2名が赴任され6月から心臓外科手術が開始されました。それに伴い、従来の循環器センターという名称はなくなります。

開院当時は循環器の全構成人数は7名ほどであり、循環器センターという枠で活動せざるを得ず、また、循環器疾患の特殊性から少人数ながら当時から循環器は独自に当直体制を組んでおり現在に至っています。両先生の赴任に伴い、循環器センターという名称はなくなり、それぞれ循環器内科および外科として活動していくこととなりますが、両診療科は両輪の輪を形成するものであり、相互理解を深め、お互いに協力し、今まで以上に患者のため、粉骨砕身努力したいと思います。

4. D グループ (消化器) 15:40~15:50

消化器分野がめざすところ

高田伸夫

消化器班は、上部・下部消化管疾患から肝胆膵疾患にいたる各種多様な消化器疾患の全てにおいて的確な診断と最善の治療を可能にする診療班であることをめざす。臨床面においては日本最高水準の診療レベルを実現する人材を育成すること、研究面においては臨床で生じる課題を的確に拾い上げられる強い問題意識を持ち続け、その結果得られた課題を解決し医療現場に還元できることを可能にする研究が実践できる人材を育成すること、その両面を実践できる組織をめざす。

5. E グループ (神経内科) 15:50~16:00

神経内科着実な1歩へ

榊原隆次

Eチームは「5+1名で内科3本柱のできる限りのことをやってみよう」にて、毎朝の救急カンファランス、岸雅彦先生は病棟重鎮として広くコンサルトを頂き、館野冬樹先生は晴れてポストク助教となり、露崎洋平先生は英文論文の2つ目を発刊し、2014年10月から期待の相羽陽介先生が合流し、心理の尾形剛先生は、2013年の認知症疾患医療センター指定を受け、裏方として熱心に検査を下さっています。榊原は佐倉発の「パーキンソン病自律神経(膀胱)治療ガイドライン」(欧州・日本同時進行チーフを務めています)作成中です。発信では、2014年度のシンポジウム・ランチョンセミナー7回、英文論文15編でした。今後ともどうかよろしく願いいたします。

第VII部 特別講演 16:10~17:10 座長:鈴木康夫

講師:奥村康先生

順天堂大学大学院アトピー疾患研究センターセンター長

演題:免疫制御の新戦略

奥村康先生 ご略歴

1942(昭和17)年6月島根県生まれ

千葉大学医学部卒業後、米国スタンフォード大学医学部・東京大学医学部を経て

1984(昭和59)年より順天堂大学医学部免疫学教授、医学部長[2000(平成12)年]

2008(平成20)年4月順天堂大学大学院アトピー疾患研究センター長

受賞:サブレッサーT細胞の発見者、ベルツ賞、高松宮奨励賞、安田医学賞、Institute for Scientific Information (ISI) 引用最高栄誉賞、日本医師会医学賞 など

著書：「不良」長寿のすすめ（宝島社新書），腸の免疫をあげると健康になる（アスコム），免疫力をグングンあげる「不良長寿生活」（徳間書店），やっではいけない健康法（三笠書房） など

第 VIII 部 研修医発表表彰式 17：10～17：20 龍野一郎

閉会の挨拶 鈴木康夫教授 (17：20～17：30)